

岡崎か何處かで、俺は途中下車した。

停車場のベンチに横になつてゐるのも退儀で、俺は地べたにへたばつて砂を嘔み、ベンチに獅子嘔み付いたりした。

愈々今はの際が來た様にさへ思つた。

夕方でもあつたが、待合所の人の顔が、女を見れば姉に見え、男を見れば弟に見えた。

それ丈血の氣が何うかなつて、色んな幻想や幻聽を經驗した。

親子丼を俺の目の前へ持つて來てくれた奴がある。

俺は頭がバンクしたのだ。

四五人の巡査が來て、無理に俺を引き起して汽車に乗せようとする。

此處に死なれてはたまらないとでも云ふ風に、角力取みたいなデツブリした署長みたいなのが先頭に立つて、

『日本男子だ、何が死ぬ事位』とか言つて俺に生氣を與へようと試みたが駄目だ。

俺は二三間歩いてへたばつたのだ。